批評・紹介

「清末政治思想研究」

小野川秀美著

昭和三十五年三月　東洋史研究會發行

本文　四八〇頁　索引　一四頁

戰後十數年にわたつて研究を進めてこられた小野川氏の論文集ー「清末政治思想研究」を手にして、私は、自分の中にーいささか隱當を缺く表現ではあるがーある一種の〝なつかしさ〟がこみ上げてくるのを禁じ得なかつた。私のように、戰後全く新たに研究を始めたものにとつては、當時、この分野において、直接利用することのできるモノグラフイーは、ほとんど皆無であつたといつてよい。斷片的な記述や紹介は存在したけれども、ある程度の體系性をもち、また眞に歷史に內在したような論考は、餘りにも稀であつた。そうした中にあつて、小野川氏の論文だけはー「これだけは、絕對にたしかな」モノグラフイーであつた。勿論、このような事情の一半は、清末政治思想史研究の分野が、從來、あまりにも未開拓であつたことに歸せられるかも知れない。そうして、そこにはまた、われわれの考慮を必要とするような樣々の歷史的、社會的な事情も存在しているのであろう。しかし、そのような事情はともあれ、小野川氏の論文に對するこうした氣持は、われわれの世代にとつては、おそらく共通する所のものであろうと思われる。それらの諸論文は、常に、われわれに、先づ幾つかの森の所在を確實に敎え、またその中の巨木を指示し、そうすることによつて、われわれに、その間をつなぐ道を發見しようとする努力を起させるものであつた。ここに集められた論文は、いずれも、戰後の研究において、このようなパイオニアー的經歷をもつた作品であるといつて、決して言いすぎではない。

ところで、いま、これらの論文が時代順に排列、增補され、本書にまとめられたのをみると、それは、單なる論文の集積をこえて、むしろこの時代を蔽う一つの通史を形成するものとなつている。そうして、私には、そこから一種獨自の學風が、たちこめているように感ぜられる。それは、たとえば、錢穆の「近三百年中國學術史」のように、思想家という嶺から嶺へと、思想史を辿つて行くやり方ではない。あるいは、侯外盧の「近代中國思想學說史」のように、社會情勢、經濟情勢との連關の下に、思想の發展をとらえる思想史ではない。また、J. R. Levenson "Confucian China and its Modern Fate" のように、嚴密なカテゴリーの鑄造によつて、その時代の思想のもつ本質を鋭くえぐりだそうとするような性質のものでもない。こうした方法とは異つて、それは、いわば、歷史の流れの中に、思想の流れを追跡する思想史なのである。ここでは、思想もまた、歷史と同樣に「一歩一歩」とそのうねりを增して行く。そうした「思想の流れ」が個々の思想家を扱いながらも、時代の中に追求され、時代と共に展開されるのである。したがつて、たとえば、第三章「康有爲の變法論」や第七章「章炳麟の排滿思想」は、いずれも「康有爲とその時代」、「章炳麟とその時代」と言いかえられてもよいような側面をもつている。事實、われわれが本書を讀む

と、康有爲、譚嗣同、梁啓超、章炳麟といつた思想家の、その時代において占める位置が、適確に指示されていることに氣づくのである。そうして、これが先ず、本書の第一の特徴を形成することになつている。

しかし、こうした方法が可能であるためには、人は、最初から嚴密な概念規定を下して、歴史を截斷して行くわけにはいかない。そのためには、ごくゆるやかなカテゴリーを設定して、それでもつて歴史を蔽つて行くようにすることが必要である。著者が本書において試みられるのは、こうした方法なのであり、ここでは「洋務論」「變法論」「革命論」という三つの大まかな柱が、清末思想史を追跡する重要なメルクマールとして取上げられている。著者によれば「清末の政治思想は、洋務論、變法論及び革命論の三段階を主軸として形成され」ている（序）。「洋務論と變法論は共に改革論であるが」「特徴的にいうならば、洋務論は機器、變法論は制度にその主眼があり」、しかもこの兩者は「排滿を第一前提とする革命論」とは根本的に異つている。これらの三者は、ゆるいカーブをえがきながらも、時代を追つて高まつて行き、やがて辛亥革命へと到達する。それ故に魏源から章炳麟に至るこの時代は、幾つかの學派の別によつてではなく、また單なる時期區分によつてでもなく、むしろそれらをも包みこむような、この三つのカテゴリーによつて分析されるわけである。われわれは、本書における、こうした概念設定を多分第二の特徴として規定しておいてよいであろう。

けれども、ここでこのように大まかな枠組について指摘することは、もとより本書における分析素材の扱い方が嚴密さを缺くということを意味するものでは決してない。むしろ逆に、對象について密着すればする程、そこにひそむ微妙なニュアンスは、一面的な斷定を不可能にし、かえつて最大公約數的なあるものが必要とされるのであろう。この點について、著者の嚴密さはきわだつたものがある。そうした例は本書の到る所にみられるが、たとえば康有爲の著作「人類公理」について（一四二頁）、「禮運註」の成立年代について（一四五頁）、また譚嗣同の手紙の日附けについて（二七四頁）、その嚴格な考證は、何人をも承服させねばやまぬ力をもつている。したがつて、こうした考證の上に立てられた思想内容の追求もまたその限りにおいて、否應をいわさぬ實證性をもつてわれわれにせまつてくるのである。著者は、このような嚴密な操作を繰返すことによつて、多くの材料の中から、同じものとそうでないもの、似ているものと似ていないものとを、選りわけ、且つ整理する。われわれは本書によつて、「こうした考え方は、何時頃から始まつたのか」という思想の系譜と、「それは、この時代において如何なる位置を占めているのか」という思想の比重を、最も確實な實證性に支えられながら學ぶことができるであろう。このことは、著者のように、この分野における膨大な文獻を探究、渉獵した人にのみ、はじめて可能であるといつてよい。本書の第三の特徴は、いわば、全篇をつらぬくこの實證性の中に求めることができる。

ところで、本書の特徴が以上のようなものであるとすると、ここにおいて、歴史はどのように展開されているであろうか。私は、ごく簡單にその内容を辿りながら、併せて若干の問題點を書きつらねてみよう。

第一章「清末洋務派の運動」は、中國が阿片戰爭、太平天國の亂、アロー號事件を經過することによつて、いわゆる洋務派、洋務運動が生み出されて行く過程の分析である。中國の危機に直面して、先ず擡頭してくるのは、いうまでもなく、西洋の機器の導入、海防の充實という動きであろう。本章のねらいは、こうした思想潮流を魏源、馮桂芬、薛福成、王韜、曾紀澤、張自牧等の論策を通じて、綿密に追求することにある。けれどもここで、注目しておくべきことは、著者が、一方で、刻一刻と高まつて行くこの動きを跡づけながらも、他方、それらの論者の間にひそむ樣々のニュアンスの相違をも、同時に選りわけていることである。それは、ともすれば洋務論として一括されがちなこの時代を、きわめて微視的に觀察することによつて、その鮮明な實像を提供してくれている。このことは、本書の中でも、最もすぐれたメリットの一つであるといつてよい。しかもこの選別作業は、さらに後の時代との關連においても、意外に重要な意味をもつているのである。著者によれば、樣々の洋務論の中には、時代の進展につれて、ほぼ二つの傾向が看取されるようになつてくる。すなわち、「内政と軍備を本末の關係におく」「内政重視」という方向と、「機器を古典に附會せしめる」「古典附會」という方向とである。洋務論の中に混在しているこれらの傾向を、著者がここで分類しておかれることは、おそらく決定的に重要であろう。何故なら、それらは、當時における思想の流れであると同時に、また來たるべき時代の思想の萠芽ともなり得るからである。そうして著者は、この兩傾向を取上げつつ、併せてそこに含まれる自己矛盾の要素をも指摘する。「内政重視」とは、元來海防の充實を目的とする洋務論の枠からは、はみ出すものであろうし、また機器を古典に附會することは、さらに制度をも古典に附會せしめる可能性をもつているからである。いわば洋務論はこうした過程を通じて、徐々にではあるが、「自己分裂」的な樣相を呈しつつあつたのである。本章は、このように、洋務論の潮流と、またそこに包含されている矛盾とを共に取りだすことによつて、きわめてブリリアントな一章を形成することになつている。

ただ私は、ここで一つだけ疑問を提出しておきたい。著者は、「洋務派」「洋務運動」という言葉を一括して、かなりアンヴイギュアスに使用しておられるが、この場合、「洋務派」の思想と「洋務運動」の思想とを區別して考えた方がよいような場合があるのではなかろうか。おそらく當時の先進的知識人は、多かれ少なかれ、洋務派へと傾斜して行つたのであろう。しかし彼らの思想は、洋務運動（具體的には、その推進者であつた曾國藩、李鴻章、張之洞等）のそれとは、やはり樣々の面において異つているのである。著者は、これらの思想を直接には扱つておられないけれども、洋務派といつた場合、かうした運動乃至人物の配置は無視することができない。したがつて、むしろ「運動」の思想と「思想家」の思想を、あらかじめ區別しておいた方がよいように思われる。著者は、本章において、樣々の素材に對する綿密な追求の結果、時として、その間の解釋の分裂乃至矛盾の前にたたずんでおられるようにみえる時があるが、そうした不分明さは、このような思想配置圖を作ることによつて、かえつて避けることができるかも知れないのである。

さて、洋務論の後を承けて、第二章から第五章までは變法論の段

階である。ここでは「清末變法論の成立」、「康有爲の變法論」、「譚嗣同の變革論」、「戊戌變法と湖南省」が、夫々、取扱われている。こうした目次からも推察されるように、この部分の特徴は、變法思想そのものと共に、それと同程度の比重をもつて、當時の思想狀況、政治狀況が解明されている點にある。第三章「康有爲の變法論」は、特に戊戌變法運動との關連における康有爲思想の分析によつて、思想史であると同時に政治史の觀をも呈しているのであるが、こうした特徴を最もよく表わしているのは、勿論第五章「戊戌變法と湖南省」であろう。ここでは、湖南時務學堂、南學會、湘學報、湘報等を素材としながら、その地に活躍する譚嗣同、梁啓超、唐才常等の姿を描き出し、それによつて變法運動の現實の一側面を明らかにしようとつとめている。いわばこの部分は、登場人物とその背景の有機的な結合に成功しており、かくして變法論が戊戌變法運動に收斂されて行く過程、及び變法運動の實態が、きわめてあざやかに解明されているのである。

ここで先ず扱われる思想家は、湯震、陳虬、鄭觀應、陳熾等—變法論前史とも稱すべき人々であるが、（第二章「清末變法論の成立」）、その集約點に立つのは、もとより康有爲である。著者によれば、康有爲思想の役割は、ほぼ次の點に求めることができる。すなわち、康有爲は、すでに洋務論の中に顯在化しつつあつた「內政重視」「古典附會」という二つの傾向を、最も典型的に結合することによつて、洋務論から變法論への轉換を遂行したのである。先にもみたように、內政が重視されることは、やがて「西政」—西洋の議會制度に對する關心をも呼び起すけれども、それだけでは、まだ變法論の成立には十分ではない。內政の重視が、さらに內政そのものの變革にまで高められるためには、何らかの意味において、變革に對する正統性が賦與されねばならない。康有爲は、まさにこの根據づけを、「古典附會」の最高度の利用によつて定式化したのである。彼は「西洋の致强は實は經義の精に暗合するもので、別に新創の治をなすわけではない」と主張する。ここでは「西洋と周または堯舜三代は經義を媒介として互に緊密に結ばれ」るのであり、かくして康有爲において「復古と維新は、意を堯舜三代に採り、範を西洋に求めることによつて、その辿るべき地點に辿りつく」のである。しかも、彼が戊戌變法において、意圖したものは、著者によれば、「舊淸朝を否定して新淸朝を樹立すること、淸朝を近代的な立憲國家に立て直すこと」にあつた。「それは革命ではないが」「しかし當時において、殆ど革命的といつてよいほどの意味をもつていた」のである。以上のような分析からもうかがわれるように、著者の康有爲に對する評價は、きわめて高いといつてよい。それだけに康有爲思想の解明は、特に緻密且つ動的であり、譚嗣同の變革論の形成過程を扱つた第四章に比べても、一層のキメの細かさをみせている。この變法論の部分は、おそらく著者が最も精力を傾注された所であろう。ここでは、一方で思想の流れが流動的にとらえられながら、他方、それがやがてドミナントなものになつて行く過程が、常に時代の狀況の中に追求されている。こうした手法は、特にこの時代—すべての課題が變法論へと集中して行く時期においては、最も精彩を放つものといつてよい。私は本書の大半を占めるこの部分が、それにふさわしい重量感をもつていることを附言しておこう。

但し、私は、行論の過程において、若干の疑問を抱かされたことをもここで併せて述べておきたいと思う。著者は、第五章において梁啓超、譚嗣同、唐才常等の「湖南自立運動」の意圖について述べておられる。それは、變法運動の過程の中で、いわば湖南の獨立をめざした運動である。しかしそれは、康有爲の「新王朝の樹立」の意圖とは、どう關連するのであろうか。湖南自立は、王朝の分裂を意味しはしないであろうか。著者のように、康有爲と光緒帝、梁啓超と陳寶箴、「その間君主と巡撫の相違はあるけれども……中國を近代的な國家たらしめようとする意圖においては變りない」と考えることは、餘りにスイーピングにすぎはしないだろうか。周知のように、ここで活躍した唐才常は、やがて一九〇〇年には、自立軍起義の指導者として現われる。その起義の内容については、まだ疑問の點が多いけれども、しかし少くともそれが、戊戌變法の康有爲のように、トップ・レベルの權力を動かすことによつて、變革をはかろうとしたものでないことは明らかである。それは中層乃至下層レベルの權力の中から生れた、省あるいは地區單位の運動なのである。だとすれば「湖南自立」の意圖とは、すでに戊戌變法の中に、後に至つて顯在化するような、様々のオリエンテーションをもつた思考が混融していたことを意味しはしないだろうか。ここにおいて問題となつてくるのは、おそらく、それがどのような變法論であるかということ、あるいは變法論の意味であろう。私は一後にも觸れる所であるが一著者が、時代と狀況に密着することによつて、思想研究を、事實過程としての政治史の中にのめりこませているような感じを與えられる時がある。そうしてそれが逆に、意味づけの曖昧さをもたらしているように感ぜられるのである。變法運動の意味づけを明確にしておくことは運動敗北後の時代を辿るに當つて、決定的な重要性を帶びてくるのではなかろうか。

さて最後の二章は、革命論を扱つた「清末の思想と進化論」及び「章炳麟の排滿思想」である。この部分は、比較的相互に獨立したテーマを取上げており、前者の素材は梁啓超の「新民說」、後者のそれは章炳麟の著作、特に「駁康有爲論革命書」によつて代表されている。著者は、先ず第六章において、戊戌政變後の時代のあわただしい推移を明らかにする。すなわち嚴復によつて紹介された進化論は、梁啓超において、最初は、康有爲の大同說を裏づけるものとみなされていたのであるが、やがてこの時代にはいるや、それは逆に「西學の中學への附會」を反省させる契機となる。「優勝劣敗、弱肉强食」という進化の公理は、中國の危機の中で餘りにも明らかに證明され、安易な「古代附會」は否定されざるを得なかつたのである。しかもそれと共に、梁啓超においては、時代に密着した新しい社會倫理一「新民說」が打出されてくる。著者は、梁啓超の左傾のピークともいうべき時期を取上げつつ、この過程を分析する。しかし、このような、いわば變法論の系譜をひいた梁啓超と並んで、漸次クローズ・アップされてくるのは、いうまでもなく、章炳麟を中心とする强烈な排滿革命論である。したがつて、ついで第七章では、この主題が特に康有爲との對比において追求されることになる。康有爲は、華夷の別を文化の問題とすることによつて、戊戌變法後も「滿漢不分、君民合治」という、清朝の立憲化を固執したが、これに對して章炳麟は、徹底的な排滿光復を唱動し、そのこと

によつて民族革命の課題を眞正面から提起した。そうして著者によれば、この革命論こそが、やがて一九一一年の辛亥革命を招來するのである。これらの二章は各々相互に獨立性の高いものではあるが、そこに共通するモメントを取りだせば、著者の力點は自ら明らかになろう。すなわち、兩者はいづれも、康有爲によつて代表される變法論とは、截然と區別されている。それは二十世紀初頭の新しい段階を明瞭に象徴していたのである。しかも著者の示唆に從えば、この革命思想と新民說は、やがて夫々辛亥革命と新文化運動となつて結實するに至る。この部分は、革命論の段階を全面的に蔽うものではないけれども、本書におけるウエイトは決して輕視してはならないであろう。ともあれ著者は、このような廣汎な展望を示しながら、この書物を終えることになる。

以上、きわめて大まかなアウト・ラインではあるが、私は、できるだけ本書の內容に則しつつ、その構成を提示することにつとめてきた。おそらくこうした紹介によつても、本書の內容は、ほぼ理解されるであろう。洋務論、變法論、革命論という範疇は、行論の中でよく生かされており、それらの合成によつて歷史の全體像が形成されている。われわれは、本書によつて、この時代のトータルなイメージを得ることができる。私は、ここで、著者の研究が、その獨自の方法の下に、豐かに實つていることを、あらためて確認しておきたいと思う。

なお最後に、私は、殘された餘白を利用して、すでに述べてきた疑問とも關連させながら、本書をめぐる若干の問題點について附け加えておくことにしよう。

私は、先に、變法論の部分で、その意味づけの問題について書いておいたが、私が本書においてスムースな思想の流れを追いつつ、時として疑念を感じさせられたのは、窮極する所、この問題に關連してくるようである。たとえば、私は、章炳麟の革命論が說かれ、その排滿思想の强烈な影響が述べられる時、「何故、排滿思想は起つたか」、「それは、何故この時點において有力たり得たか」という疑問を抱かされるのである。つまり、「それが從來の排滿思想と異る意味は、どこにあるのか」、「その思想が受入れられた意味は、どこにあるのか」ということを尋ねたくなるのである。また梁啓超の新民說について言われる時、「彼は何故、新民說を書かねばならなかつたのか」ということを問題にせざるを得なくなるのである。勿論、本書においても、こうした理由づけが行われていないわけではない。あるいは「異族支配」が說かれ、あるいは「進化論、共和思想の攝取」が說かれている。しかし、もし進化論、共和論の影響であるとするならば、それは何故、中國においては新民說となり、日本においては加藤弘之を生み出したか、あるいはまた、章炳麟の「俱分進化論」は何を意味するのかということが問われねばならないであろう。換言すれば、諸々の可能性の中から一つの現實性が生み出されて行く過程が、問題とされざるを得ないであろう。

私がこうした問題を抱くのは、一方では、本書の立場に卽しつつも、他方、たしかに本書を離れた所に身を置いているからである。しかし私がここで述べようとしているのは、勿論、社會的、經濟的要因の無視とか、下部構造との關連の缺如といつた次元の問題ではない。これは、あくまで思想內部の問題である。すでに述べたよう

に、洋務論から變法論への展開過程において、著者は洋務論の自己分裂について言及しておられる。おそらくこうした觀點が、特にこの過程の分析に迫力をもたせているのであろう。それは、洋務論の中に含まれる幾つかの可能性が、その「自己分裂」を通じて、やがて變法論という現實を生み出して行く過程でもある。しかし變法論もまた「自己分裂」を經驗しないであろうか。あるいは革命論は「自己分裂」しないであろうか。行論の中にみる限り、この兩者について、こうした視角は必ずしも十分に生かされているとは言い難い。もしこの視點が曖昧であるならば、思想の流れは、容易に時代の流れの中に埋沒し、また思想過程は事實過程の中で、その姿を稀薄にする。したがつて逆に、ここでは、段階的規定そのものが硬化して、きわめて形式的な基準をもつて各思想が截斷されるおそれなしとしないのである。

私は、著者の「卽物的」な研究態度の中から、多くの敎えを學びとることができた。世の中には、意味づけばかり試みて、甚だしい見當違いをおかす者もある。けれども私は、特に思想研究の場合、「卽物性」の中にもまた、一種のそれ自體がもつ矛盾が存在し得ること、したがつて、素材から問題を抽出し、再びそれを素材へと還元し直すという不斷の操作が、「卽物性」自身のためにも常に必要であることを、時として感ずるのである。かつて本誌は、ヘーゲルを引いて「意見の集積としての哲學史」を問題とされたが（十二卷、一號、編輯後記）、われわれもまた、本書の成果を、今後一層發展させて行くために、あらためて、こうした點を考慮しておいてもよいように思われる。著者の御研究に對して、心からの敬意を表しながら、本書をめぐる若干の問題點を摘記して、筆を擱く。

（野村浩一）

中國古代の社會と國家

増淵龍夫著

昭和三五年二月　弘文堂發行

本文四五二頁

本書は著者の一九五一年から五八年までの論文集だが、序論の「中國古代社會史研究の問題狀況―學說史的展望」だけが本書のために一九五九年にかきおろされた。本書に對する書評としては「史林」四三卷四號（一九六〇・七）に河地重造氏が、「歷史學研究」二四四號（一九六〇・八）に五井直弘氏がすでにかいている。河地氏は、本書の序論に立派な學說史展望があるにもかかわらず、もう一度自己の展望から說きおこして學界における本書の地位を明らかにし、全篇の簡略な紹介をし、將來の問題點にまで論及してある。五井氏は著者が任俠的習俗を社會史の大問題としてとりあげたのは、現實の生活に結びつかないような學徒の實踐意識のあり方に對する著者の批判がその動機だろうと考えている。私にいえそうなことはみな先にいわれてしまつた形である。その道の權威であり、かつは增淵氏のもつともよき理解者である宇都宮淸吉氏は、編輯者の話によると自分が書けばほめることばかりで書評にはならんだろうからと體よく斷わつたという。事實宇都宮氏は本書の中の一篇である「先秦時代の山林藪澤と秦の公田」に對して最大級の讃辭を贈つている（東洋史研究一六・四、二六八頁）。問題意識の明確さ、研究態度の一貫していることはもちろん、創意もあり考證も博引旁證至